

百人一首の撰歌について(続)

(一)

島田良二*

百人一首の恋の歌で注目されるのは、修辭の面では序詞の用法である。古今集における序詞の用法について以前考察したことがある〔古今集とその周辺〕が、古今集の序詞は「詠人しらず時代」に多く用いられて、「六歌仙時代」に衰退したが、その代わりに縁語・掛詞が現れた。序詞はまた「撰者時代」に復活して多く用いられるようになった。それを晴の歌の発想・表現として解釈した。

百人一首を見ると、恋歌に序詞を用いた歌が多いことに気づくだろう。八代集では序詞の多い集は古今集・拾遺集であり、後撰集・後拾遺集は詞書のある贈答歌が多く、縁語・掛詞の用法が目立ち、対照的である。金葉集以下新古今集にかけては題詠が主で、それも細分化され、「寄水鳥恋」・「寄夢恋」・「月前恋」などといった題詠が中心になる。定家は百人一首を撰ぶにあたって、古今集の歌風を尊重し、古典に帰る精神が百人一首を撰ぶ上に大きく作用したように思われる。定家が百人一首を撰んだのは七十四歳の時と言われる。新古今集よりも新勅撰集の方が序詞の恋歌が比較的多い。そういう点を考えると、定家の古今集尊重の気持が百人一首にも現れているのであろう。

百人一首の恋歌は四三首であり、その中、序詞の歌が十八首ある。それ以外に序詞を用いた歌は中納言行平の離別の歌一首である。その十八首の歌人をあげると、人麿・陽成院・河原左大臣・行平・敏行・伊勢・三条右大臣兼輔・参議等・好忠・重之・能宣・実方・大式三位・紀伊・崇徳院・皇嘉門院別当・讚岐・定家と全時代にわたっている。

序詞を(1)「同音を導き出す序詞」(2)「比喩的な序詞」(3)「掛詞で下句にかかる序詞」に分けると、(1)が三首、(2)が九首、(3)が七首になる。

(序)

定家は百首という定数歌を撰歌するに当たって、並々ならぬ苦心を払ったことについて、前号で述べたが、それについて略述すると、配列されている百人一首は作者を年代順に並べ、そこに和歌史的な流れを感じ取る配慮でなされているが、それらの歌を勅撰集の配列に置き換えてみると、四季・恋・雑の部立から成り、実にバランスよく選ばれていることに驚く。定家はその点にも十分配慮した点を四季・恋部について前号で述べた。今回は、さらに序詞についても表現の面で定家は注意を払って選んだことおよび雑部の歌についても、定家の撰歌に当たっての苦心の跡をたどってみたい。つまり、年代順の配列を縦系とするならば、勅撰集の配列を横系とし、その縦系と横系が見事に織り成されている点について述べたい。

この比率は古今集における場合と大体同じ傾向を示している。発生的には(1)(2)(3)の順に生まれたのであろう。

次にその序詞の和歌を概観したい。

(1) 同音を導き出すための序詞の歌

②7 みかの原わきて流るるいづみ川いつみきとてか恋しかるらむ

(藤原兼輔)

「みかの原わきて流るるいづみ川」は「いつ見き」の「いつ」という音を導き出すための序詞で、その中に「みかの原」という歌枕を詠み込んでいる。百人一首には歌枕を詠み込んだ序詞が比較的多い。この序詞は一見冗長に見えるが、「わきて流るる」に募りゆく情熱的な思慕の情が込められており、下句と見事に融け合って、まだ契りを結ばない女への切なる恋心を表現している。

③9 あさちふの小野の篠原しのぶれどあまりてなどか人の恋しき

(参議等)

「あさちふの小野の篠原」は「しのぶ」を導き出す序詞で、「の」に反復したリズムカルな音の効果は、さやさやと揺れ動く心を抑制する気持が感じられ、草深い篠原にしのぶ心が象徴されている。

⑤1 かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを

(藤原実方)

序詞は、多くは上句に用いられるのが普通であるが、これは二句と三句に用いられており、また、「いぶき(伊吹)」の歌枕が「えやは言ふ」の「言ふ」と「伊吹」に掛けて、言うことができようか、できない、の意を示し、「さしも草(蓬)は「さしも」を導き出す序詞として用いられている。さらに「さしも草」の縁語として「燃ゆる」と

「思ひ」の「火」が用いられ、技巧の粋がこらされている。

以上の序詞は音を導き出すための序詞であるが、それぞれが流麗な音の響きを持つと同時にその背後に物象からかもし出される作者の気持ちがかめられており、それぞれに特色ある表現である。

(2) 序詞の比喩的な表現の歌

③ あし引の山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む

(柿本人麿)

「あし引の山鳥の尾のしだり尾の」は「ながながし」を比喩的に表現したもので、夜になると、妻と別れて谷を隔ててやすむという、あの山鳥の垂れた長い尾のように、長い長い夜を、私もまた、わびしく一人で寝ることかなあ、の意で、序詞が比喩的に表現されているだけでなく、「の」の音を四度くり返し、流麗な響きをかनाでている。この場合、山鳥のイメージがこの歌に大きく作用して効果的である。

③ 筑波嶺の峰より落つる男女川恋ぞつもりて淵となりぬる

(陽成院)

序詞「筑波嶺の峰より落つる男女川」が比喩的に用いられ、「積もりて淵となる」にかかっている。筑波山から流れ落ちる男女川の水量が積もって淵になるように、あなたに対する恋情が積もり積もって深いやるせない思いになってしまった、の意で、歌枕「男女川」が男女の仲の恋情を象徴している一方、この序詞は自然(物象)と心情(人事)が見事に融け合って表現されている。

④ 陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにしわれならぬに

(河原左大臣)

序詞「陸奥のしのぶもぢずり」に歌枕「陸奥」を用い、「乱れ」に

掛けている。「しのぶもぢずり」は、乱れ模様の草木染の衣をいう。「しのぶ」は地名「信夫郡」と摺る「忍草」の両意があるが、衣は日常生活で、身近なもので、普通は妻が染めるものであり、そのすり衣を比喩的に用いて「乱れ」を導き出している。それによって、「私の心のちぢの乱れは誰のためでもない、あなたのせいだ」と自分の愛情の不变を訴えている。

- ④⑥ 由良のとを渡る舟人かぢを絶えゆくへも知らぬ恋の道かな

(曾禰好忠)

由良の海峡を漕ぎ渡る舟人がかぢを失って、ゆくえも分からず漂うように、この先どうなつてゆくか不安な恋のなりゆきであるよ、の意で、「由良のとを渡る舟人かぢを絶え」の序詞を「ゆくへも知らぬ」で受け、さらにそれが下にかかってくる語法である。比喩的序詞が一步複雑化されている。寄るべない恋の不安が序詞に見事に生かされている。歌枕「由良のと」(若狭湾の由良川の河口あたりか)は、好忠が丹後掾になっているので、その体験が生かされたのであろう。

- ④⑧ 風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけでもを思ふころかな

(源重之)

序詞「風をいたみ岩うつ波の」は「くだけで」の比喩として用いられ、かつ「岩」は女の冷淡さを表わし、「波」に砕け散る男の激しい情熱の片思いの無力さをたとえている。「おのれのみくだけで」に無残な自分の空しい恋慕の苦悩が示されている。序詞が巧みな技法で鮮明に下旬に生かされている。

- ④⑨ みかきもり衛士のたく火の夜は燃え昼は消えつつものをこそ思

へ (大中臣能宣)

「みかきもり衛士のたく火の」は比喩で、この「の」も比況の格助

詞で、：のように、の意、宮中の御門をまもる衛士のたくかがり火のように、の意。「夜は燃え」は、衛士のたく火と、胸中の思ひ(火)をかけている。序詞の比喩が下の「夜は」「昼は」と対照的に生かされて、上の句の焰の情熱と下の句のしほみふさぐ物思いが際立って美しく表現されている。暗黒の中に赤く燃えるかがり火におさえがたい情熱が象徴的に示されている。

- ④⑦ 瀬を早み岩にせかるる滝川のをれても末にあはむとぞ思ふ

(崇徳院)

「瀬を早み岩にせかるる滝川の」「われても」を導き出す序詞。「の」は③④⑧⑨⑩の和歌に用いられているのと同様に比況の格助詞。岩にせきとめられて左右に分かれ行ってもやがて一つに落ち合うように、の意であり、岩にくだける激流とはばまれた恋にうち勝つて会おうとする、ほとばしる情熱が力強く詠まれている。「瀬を早み」の激流に恋情の激しさを示し、「われても末に」に強い決意が示されており、序詞の滝川に示された物象が下の句の心象と見事に融け合っている。

- ④⑨ わが袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らね乾く間もなし

(二条院讃岐)

この和歌は「寄石恋」という題詠歌であるが、序詞が二句・三句にまたがって用いられているケースで、その点で⑤と同様であるが、珍しい形である。発生的には上句に示される序詞の後に生まれたものである。「潮干に見えぬ沖の石の」「の」も比況の格助詞で、「乾く間もなし」にかかる。私の袖はあの人を思う恋の涙でいつも濡れていて乾く時もない、それをあの人には知らない、の意で、そこに「寄石恋」の難題を見事に詠み込んでいる。

以上九首に示されている序詞の表現はそれぞれ個性的であり、着想・表現に特異性が示されている。

(13) 掛詞で下句にかかる序詞

⑱ 住の江の岸による波よるさへや夢のかよひぢ人めよくらむ

(藤原敏行)

「住の江の岸による波」は「よる(夜)」を導き出す序詞であるが、「寄る」と「夜」の掛詞でつながっており、「住の江」の歌枕を詠み込んでいる。これは「忍ぶ恋」であるが、波の寄せては返す様子にこれ思い悩むつらい心が象徴されている。

⑲ 名にしおはば逢坂山のさねかづら人に知られでくるよしもがな

(三条右大臣)

序詞「名にしおはば逢坂山のさねかづら」の「さねかづら」は「く」つまり手繰り寄せる意と来る意を掛ける。「逢坂山」にこと寄せて「逢ふ」と「さ寝」を掛ける。このように掛詞を駆使する。逢坂山のさねかづらが逢って寝るといふ名を持っているならば、そのさねかづらを手繰るようにつつそりとあなたの名を持っているならば、そのさねかばいいなあ、の意で、忍ぶ恋の情熱を訴える序詞の修辞は見事な技法を示している。

⑳ 立ち別れいなばの山の峰に生ふるまつとし聞かばいま帰り来む

(中納言行平)

序詞「いなばの山の峰に生ふる」において、「いなば」は初句を受けて、「稲葉山(因幡国所在)」と「往なば」を掛け、「まつ」が「松」と「待つ」の掛詞。つまり、「いなばの山の峰に生ふる」が「まつ」にかかる序詞であるが、初句とも掛詞でつながっている。このように

手のこんだ技巧を用いて、因幡国へ赴任して行く行平の別れの切実なつらさを詠んでいる。

㉑ 難波瀉みじかき芦のふしの間も逢はでこの世を過ぐしてよとや

(伊勢)

序詞「難波瀉みじかき芦の」は「ふしの間も」にかかる。「ふしの間」は、「芦の短い節と節との間」の意は「ほんの短い間」の意の掛詞。「難波瀉」は歌枕。難波瀉の縁語として、「芦」・「ふし」・「よ」(「世」と「節」の掛詞)を用いる。ちょっとの間でも逢いたいのには、あなたは逢わないで一生を過ごしてしまえとおっしゃるのですか、と男の無情を恨んだ和歌。新古今集では伊勢の歌とあるが、「伊勢集」では、巻末の増補歌(無名歌)で伊勢の歌ではない。定家が誤ったと思われる。

㉒ 有馬山ゐなの笹原かぜ吹けばいでそよ人を忘れやはする

(大式三位)

この序詞も歌枕を詠み込んで、「そよ」が掛詞になっている。「そよ」が笹の葉のそよそよとそよぐ擬音語と「その通りですよ」の意を掛けている。後拾遺集所載の詞書には「かれがれる男の、おぼつかなくなどいひたりけるによめる」とある。「そよ」は「おぼつかなく」を受けて、それを逆手にとって応酬したのである。この場合、贈答歌の返歌に序詞を用いているが、その例は珍しい。

㉓ 音に聞く高師の浜のあだ波はかけじや袖のぬれもこそすれ

(祐子内親王家紀伊)

序詞「音に聞く高師の浜」は大変技巧的である。「音に聞く」は、噂に聞く、評判の高い、の意で、「あだ波」にかかる。「高師の浜」は和泉の国の歌枕。「高師」と「高し」を掛け、音に聞く高し」となる。

「の」は比況の格助詞で、……のように、の意。「あだ波」は、いたずらに立つ波の意と浮気な人、の意をかける。「かけじ」は、波をかけまい、の意と心にかけてまい、の意をかける。「袖のぬれもこそすれ」は、涙で袖がぬれては大変だ、と波でぬれては大変だ、の意をかける。「もこそ」は心配の気持を表わす係助詞。「浜」の縁語として、「波」・「かけ」・「ぬれ」を用いる。この歌は、「堀河院御時の艶書合」の歌で、中納言藤原俊忠（定家の祖父）の歌「人知れぬ思ひありその浦波に波のよるこそいはまほしけれ」の返しの歌である。俊忠の「荒磯の浦」に対して「高師の浦」を詠み、「波の寄る」に対して、「あだ波はかけじ」と返したのである。大変表現に技巧をこらした歌である。

⑧⑧ 難波江の芦のかりねのひとよゆゑみをつくしてや恋ひわたるべき
(皇嘉門院別当)

序詞「難波江の芦の」は「かりね」を導き出す修辞であるが、「かりね」が「仮寝」と「刈根（刈り取った根）」の掛詞で、「ひとよ」が「一節」と「一夜」の掛詞。「みをつくし」が「滌標」と「身を尽し」の掛詞で、「難波江（歌枕）」の縁語として、「芦」・「刈根」・「一節」・「滌標」・「渡る」を用い、技巧の粋を尽くしている。その上に流麗なリズムでうたいあげている。このように、平安後期になると、序詞・縁語・掛詞・歌枕が一体となって一首の中に融け合って詠まれている。以上のように百人一首の恋歌は序詞のさまざまな技巧をこらしたすぐれた歌の粋が集められていると同時に、そこに序詞の修辞的変遷をたどることができる。定家は序詞の歌を時代的にも全体を見渡してバランスよくとっている。これは明らかに撰歌に当って定家が意識して留意した結果であろう。序詞の歌の、物象から心象への展開が朗詠にもふさわしく、それが結果的に、後世、百人一首のカルタとして世に

もてはやされたのも当然であろう。

(二)

すでに、前号において、四季の歌、離別・羈旅の歌、恋の歌を概観し、そこに勅撰集に近似した撰歌がなされていることを考察してきた。つまり百人一首は年代的に配列されており、和歌史的構成をなしていると同時に勅撰集の配列にも置き換えることができる二重構造をもった百首であることを論述したが、次に最後の部立「雑歌」を概観したい。

雑歌は二十首である。その内別は、古今(三首)、後撰集(一首)、後撰集(一首)、拾遺集(二首)、後拾遺集(二首)、金葉集(一首)、詞花集(一首)、千載集(五首)、新古今集(二首)、新勅撰集(一首)、続後撰集(二首)であり、千載集を除き、どの勅撰集からもバランスよく採歌されている。それを次に示す。

(歌番号は百人一首の通し番号、歌末の番号は『定家八代抄』の通し番号)

- | | |
|----------------------------------------|----------|
| 古今・雑上 | 僧正遍昭 |
| 12 天つ風雲の通ひ路吹き閉じよをとめの姿しばしとどめむ(雑上・1454) | |
| 古今・雑上 | 藤原興風 |
| 34 誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに(雑下・1694) | 後撰・雑一 蝉丸 |
| 10 これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関(雑下・1652) | |
| 拾遺・雑上 | 大納言公任 |
| 55 滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ | |

- (雑下・1713)
拾遺・雑秋 貞信公
- 26 小倉山峰のもみち葉心あらば今ひとたびのみゆき待たなむ(秋・下482)
後拾遺・雑一 三条院
- 68 心にもあらでうき世にながらへば恋しかるべき夜半の月かな(雑中・1604)
後拾・雑二 清少納言
- 62 夜をこめて鳥の空音ははかるともよに逢坂の関はゆるさじ(雑下・1653)
金葉・雑上 小式部内侍
- 60 大江山いく野の道の遠ければまだふみもみず天の橋立(雑下・1654)
金葉・雑上 前大僧正行尊
- 66 もろともにあはれと思へ山桜花よりほかに知る人もなし(雑上・1511)
千載・雑上 周防内侍
- 67 春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜しけれ(恋二・954)
千載・雑上 藤原基俊
- 75 契りおきしさせもが露を命にてあはれ今年の秋もいぬめり(雑上・1488)
新古・雑上 紫式部
- 57 めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に雲がくれにし夜半の月かな(雑中・1615)
新勅撰・雑一 入道前太政大臣
- 96 花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものはわが身なりけり(ナシ)
千載・雑中 皇太后宮大夫俊成
- 83 世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる(雑下・1708)
千載・雑中 前大僧正慈円
- 95 おほけなくうき世の民におほふかなわがたつ袖に墨染の袖(雑下・1710)
続後撰・雑中 後鳥羽院
- 99 人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふゆゑに物思ふ身は(ナシ)
古今・雑下 喜撰法師
- 8 わが庵は都のたつみしかぞ住む世をうち山と人はいふなり(雑下・1646)
詞花・雑下 法性寺入道前関白太政大臣
- 76 わたの原漕ぎ出でて見ればひさかたの雲居にまがふ沖つ白波(雑下・1665)
新古・雑下 藤原清輔朝臣
- 84 長らへばまたこのごろやしのばれむ憂しと見し世ぞ今は恋しき(雑上・1558)
続後撰・雑下 順徳院
- 100 ももしきや古き軒場のしのぶにもなほあまりある昔なりけり(ナシ)
以上二十首を勅撰集の部立に従うと、雑上(雑一・雑二)が十三首(拾遺・雑秋一首を含めたが、四季の秋に入れることも可)、雑中が三首、雑下が四首で、雑上が多いので、定家はその点には配慮しなかつ

たように思われる。しかし、それらの和歌にはさまざまな場で詠まれた、和歌の多様性と述懐が見られ、変化に富んでいるが、やはり中心をなす歌は述懐歌であり、八首とられている。そこには世の無常を訴える哀感がしみじみと詠み込まれている。

12番の遍昭の歌は、古今集の詞書に「五節のまひひめを見てよめる」とあるように、五節の舞姫を天女にたとえた点に発想の奇抜さがある。舞姫の美しい舞いを讚美し、「天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ」と擬人法を用いて、舞い姿をいつまでも見ていたい気持を表現する。

34番の興風の歌も名歌である。「高砂の松」は歌枕としても有名な播磨国の高砂にある松で、長寿の松として以後多く歌に詠まれる。その松を例にあげて寂しい老いの孤独を述懐する、しみじみとした歌である。12番と対照的な歌である。

10番の蝉丸の歌も有名な歌で、歌枕「逢坂の関」を掛詞にして「逢ふ」「別る」を用い、そこに人生の一コマを象徴する。もちろん当時は東国へ下る人を見送り、また帰る人を迎えたわけであるが、そこに「別離」の悲しみと「再会」の喜びがおおらかに詠まれている。以後恋歌では「逢坂の関」がしきりに詠み込まれるようになる。

55番の公任の歌は、拾遺集の詞書に「大覚寺に人々あまたまかりたりけるに、古き滝を詠み侍りける」とある。この歌は公任集によると、道長が大覚寺に紅葉見物に出かけた折に滝殿で詠んだもので、「滝」の縁語として「音」「流れ」「聞こえ」を用いて詠んだ点に特色があり、同行した人々が賞讃した歌である。

26番の忠平の歌も嵯峨で詠んだ歌である。拾遺集の詞書「亭子院、大井河に御幸ありて、行幸もありぬべき所なりとおほせたまふに、ことのよしそうせんと申して」とあるように、宇多上皇のお言葉を受け

て、醍醐天皇の行幸まで、小倉山の紅葉よ散らないで待ってほしいと擬人的に詠んだもの。歌枕「小倉山」が詠み込まれている点に特色がある。

68番の三条院の歌は一転して悲歌である。後拾遺の詞書に「例ならずおはしまして、位など去らむとおぼしめしけるころ、月の明かりけるを御覧して」とある通り、讓位を決意した歌であるが、そこには三条院のこの世に対する絶望的孤独感が強く漂っている。後拾遺集の雑部には月を詠んでいる歌が多い。それを代表したのがこの歌と違ってよいだろう。

62番は清少納言の歌であり、枕草子に書かれており、有名な場面の歌である。藤原行成との贈答歌で、清少納言の面目が躍如としている。戯れの歌であるが、恋の歌らしい表現を用いて詠んだところにおもしろさがある。

60番の歌も小式部と定頼との説話で有名である。金葉集の詞書に示されている通り、その場で即座に詠んだ歌であるが、「いく野」「ふみ」の掛詞、さらに「橋」「ふみ(踏み)」の縁語、「大江山」「生野」「天の橋立」と丹後への道の地名を詠み込んだ技巧の粋を極めた歌である。この話は『袋草紙』『俊頼髓脳』『十訓抄』などにとられ、有名になる。66番は前大僧正行尊の歌で、金葉集の詞書によると、大峯^{おおみね}で詠んだ歌である。大峯は当時の修験道の代表的な霊地であり、熊野の山奥にある。そこで、孤独の中で修行する詠者は桜花に懐しい共感をおぼえたのである。

67番は周防内侍の歌であるが、60番・62番の歌に類するものである。千載集の詞書によると、大納言忠家との戯れの歌で、二条院における生活の一コマである。詞書によると、人々と物語をしていた時、周防

内侍が寄り伏して「枕がほしい」と言ったので、忠家が御簾の下から腕を出したので、即座に恋歌に仕立てて詠んだ、その当意即妙の機知がこの歌の特色であり、小式部・清少納言の歌と同様、当時の和歌の姿の一面をよく示している。

75番の歌は藤原基俊の歌で、これも千載集の詞書によって理解できるものである。雑歌はほとんどが詞書によって作歌事情を知ることによって理解される歌が多い。そこに特色があると言ってもよい。それを前提にして選んでいるのである。また、そこに雑歌のおもしろさがある。この歌は、光覚が維摩会の講師を望んでいたが、なれなかつたので、基俊が太政大臣忠通に頼んだところ、「しめしが原」の古歌を示して承諾したのに、それが果されなかつたので、それを恨んで訴えた歌で、古歌「なほ頼めしめしが原のさせも草わが世の中にあらむ限りは」をふまえて詠んだ歌である。そこには晩秋の季節を背景に落胆の悲哀がしみ々と表現されている。

57番は紫式部の歌である。これも清少納言・小式部・周防内侍の歌と同様に日常の生活の場で詠まれた歌である。新古今集の詞書によると、幼友達が久しぶりに訪ねて来て、あわただしく帰って行ったので、別れを惜しんで詠んだ歌であるが、恋の後朝の別れの歌の表現を用いている。このような生活の場で速詠した歌をも定家は和歌の特色として秀歌に選んでいる。

96番は藤原公経の老いを嘆く述懐歌である。栄華を極めた太政大臣であるだけに老いの悲しみを痛感したのである。世の無常・孤独感・寂寥を詠んだ歌は34・66・68・83・84・96・99・100番などであり、雑部の中核をなしている。

83番は藤原俊成の歌であり、千載集の詞書に「述懐の百首の歌よみ

侍りける時、鹿の歌とてよめる」とあるように述懐百首の一首である。96番は桜を媒介にして詠んでいるが、俊成は鹿を媒介に詠んでいる。俗世の離れた山奥でさえ鹿の悲しい鳴き声が深い嘆きを与える、どうしようもない無常感が詠み込まれている。

95番は前大僧正慈円の歌であり、83番の述懐歌とは一転して、仏の力でうき世の民を救済しようという決意を詠んでいるが、「慈鎮和尚自歌合」の歌で、判者の俊成は「初めの五文字より、心おほきにこもりて、末の匂ひまでいみじくをかしく侍る」と評している点に謙虚さが伺われ、定家もそこを評価したのであろう。百人一首の中では異色の内容の歌である。

99番は後鳥羽院の歌である。定家は後鳥羽院に対する思いはひとしおのものがあつたであろう。この歌は五人百首の中の一詩であり、院は二十首(春五首・秋十首・述懐五首)を詠んでいる。その述懐歌五首の中の一詩である。五人の中には定家もおつた。定家はこの一首の選択にこめた思いは特別のものがあつたであろう。世の移り、世の無常を思うと同時に99番に後鳥羽院、100番に順徳院の歌を置いてしめくくつたのもうなずける。「あぢきなく世を思ふゆゑに」に院自身の苦惱が伺われる。

8番は喜撰法師の歌。「しか」「うち」の掛詞を用いて、明るく淡々と詠んでおつて、少しも厭世的な感じを与えない所にこの歌の特色がある。喜撰法師は六歌仙の一人であるが、古今集にこの一首のみ採られている。この歌には掛詞が用いられているが、和歌に掛詞が用いられたのは六歌仙時代であり、その当時としては在原行平の16番の歌とともに掛詞を用いた、はしりの歌であろう。掛詞はのちに恋の歌の中心技法になる。

76番は法性寺入道前関白太政大臣（藤原忠通）の歌。詞花集の詞書によると「海上遠望」の題詠歌である。題にふさわしく、広大な海原を背景に彼方の空と海とが一つになるところに白波を遠望し、「雲居にまがふ」と表現しているところにこの歌の妙があり、雄大な趣きが感じられる長高き叙景歌である。

84番は藤原清輔の歌である。述懐歌ではあるが、しみじみとした人間的な暖かさの感じられる歌である。つらかった過去が今になってみればなつかしくしのばれるように、今のつらさが後でふりかえってみればなつかしく思い出されるであろうと、述懐し、時の流れが自分を救ってくれるだろうと悟る、そこには悲嘆を越えた静かな安らぎさえも感じられる歌である。

100番は順徳院の述懐歌である。悲劇の主人公であり、佐渡で崩御した帝であれば、定家としては、最後にこの歌でしめくくる定家の心境を思いやることができる。この歌は『順徳院御集』によると「二百首和歌」の中の一詩であり、二十歳の作である。その五年後に佐渡に配流されている。そのような混乱した政情の中で詠まれた歌である。この歌には宮中の荒廃した中において、栄えた御代を思い、現在の衰退を嘆く悲痛な感慨がこめられており、公卿定家としても同感する思いがあったであろう。時に定家は七四歳、そこに世の移り変り、無常を感無量の思いで感じ取ったであろう。

さて、雑歌を勅撰集の成立順に、また、雑上・中・下の順に配列し換えて一覧したわけであるが、雑歌には、四季・恋歌と違った和歌のさまざまな機能があり、その場で詠まれた和歌の多様性を知ることができ、和歌が生活の中で、いかに重要な表現手段であることか分かるわけであるが、その配列に当って、配列の仕方を前述の配列と違えて、

主題別、その詠まれた情況などに分けて工夫した配列をしたならば、一層定家の撰歌の苦心を伺うことができるかもしれない。いずれにせよ、百人一首を撰歌するに当って定家の苦心が部立別においても並々ならぬものがあったことが推察できよう。それは定家が『定家八代抄』によって百人一首の歌を選んだからこそ可能であったであろう。